様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０４９９

研究課題名（和文）高齢期における情動と身体・生活機能に関する研究

研究課題名（英文）Study on Emotion, Physical and Life Functions in the Elderly

研究代表者
鈴木　圭子（Suzuki, Keiko）

秋田大学・医学系研究科・教授

研究者番号：１０３４１７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：地域在住高齢者における喪失体験と、主観的な心の健康状態の関連、過去1年間に転倒経験のある者の特徴を分析した。また、日記への感情表出の効果を分析した。分析の結果、喪失体験の多い者に心の健康状態は良くない傾向にあったが、地域の互助がよく行われていると認識した者に自覚的な心の健康状態が良い傾向にあった。日記への感情記述の効果として、希望得点が有意に上昇する傾向にあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
高齢期には、身体機能の低下、健康上の問題、役割の変化、大切な人との別れなど喪失を経験する機会が増加する。このような喪失体験から心の健康状態も低下することがある一方、高齢期における新たな価値観の創出や獲得体験にも注目されている。
本研究では、地域在住高齢者における喪失体験と、主観的な心の健康状態の関連、過去1年間に転倒経験のある者の特徴、また、日記への感情表出の効果を分析した。

研究成果の概要（英文）：We analyzed the relationship between the experience of loss and subjective mental health status among older adults living in the community, and the characteristics of those who have experienced a fall in the past year. We also analyzed the effect of expressing feelings in a diary.
The results of the analysis showed that the mental health status tended to be poor among those who had experienced many losses, but the subjective mental health status tended to be good among those who perceived that mutual aid in the community was well practiced. As an effect of emotional descriptions in the diary, hope scores tended to increase.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：高齢者看護　地域在住高齢者　喪失体験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

高齢期には、身体機能の低下、健康上の問題、役割の変化、配偶者や知人のような大切な人との別れなど喪失を経験する機会が増加する。このような喪失体験から心の健康状態も低下することがある一方、高齢期における新たな価値観の創出や獲得体験にも注目されている。高齢者が感情を日記に書くことの効果として，脳活動の賦活による認知機能の維持・改善，不安・ストレスの解消が示唆されている。

一方、骨折・転倒は、日本において介護が必要となった原因の第 4 位となっている（厚生労働省,2019 年度国民生活基礎調査）。高齢期における転倒は、要介護の要因となるのみならず、骨折を合併しなくても転倒不安感から活動量の低下や活動範囲の縮小させる可能性がある。

本研究では、A 県に居住する高齢者を対象とした質問紙調査から、(1)高齢者における喪失体験と、主観的な心の健康状態の関連、及び地域における互助、医療職への相談との関連、(2) 日記への感情の表現により，心理状態や生活リズムに変化がみられるか、(3) 過去 1 年間に転倒経験のある者の特徴を分析した。

２．研究の目的

（1）　A 県に居住する高齢者における喪失体験と、主観的な心の健康状態の関連、及び地域における互助、医療職への相談との関連を明らかにする。

（2）　地域住民を対象に，日記への感情の表現により，心理状態や生活リズムに変化がみられるかを分析する。

（3）　過去 1 年間に転倒経験のある地域在住高齢者の特徴を分析する。

３．研究の方法

(1)　A 県 B 町の要支援・要介護認定を受けていない 65 歳以上の地域住民を対象とした質問紙調査を行った。調査項目は、主観的な心の健康状態、過去 1 年間の喪失体験（大切な人を亡くした、自身の健康状態が悪くなった、経済的な困窮が増えた、自身の役割がなくなった）の有無、地域の互助（お互いに進んで助け合っているか）、かかりつけの医師や看護師へ病気や体調のことを良く相談できているかとした。分析方法は、過去 1 年間の喪失体験、地域の互助、医療職への相談と主観的な心の健康状態との関連をクロス集計、カイ 2 乗検定を行った。

(2)　研究参加に同意が得られた対象者に、連続した 5 日間、日々の出来事並びにその日あった良かったこと（感情）を簡潔に記述してもらい、日記記述の前後で質問紙調査への回答を依頼した。調査項目は，WHO-5 精神的健康状態表、簡易生活リズム質問票、日本語版 Herth Hope Index 等であった。

(3)　分析項目を、過去 1 年間の転倒経験、ADL（老研式活動能力指標）、身体・精神の主観的健康感（4 件法）、経済状態、ソーシャルサポート・ネットワーク、難聴の有無、基本属性（性別、年齢、婚姻状況）とし、過去 1 年間の転倒経験を 1 回以上あり、なしの 2 群に分け、その他の項目間とのクロス集計、カイ 2 乗検定を行った。有意差があった項目を独立変数とし、過去 1 年間の転倒経験ありに関連する要因を多重ロジスティック回帰分析（変数減少法）で分析した。有意水準は 0.05 とした。

調査は、目的・方法、協力の任意性、プライバシーの保護について書面で説明し、回答をもって同意とした。

４．研究成果

(1)　対象者における自覚的な心の健康状態は、健康である 26.6%、まあまあ健康である 57.2%、あまり健康でない 11.8%、健康でない 4.3%であった。カイ 2 乗検定の結果、自身の健康状態が悪くなった、経済的な困窮が増えた、自身の役割がなくなった者に心の健康状態が良くない割合が大きかった。地域の互助がよく行われていると回答した者に自覚的な心の健康状態が良い傾向にあった。医療職への相談との関連は、今回の分析では有意ではなかった。

(2)　分析の結果、日記記述期間終了時，若年層において WHO-5 得点が上昇傾向にあった。高齢層では、希望得点が有意に上昇していた。日記記述前後における生活リズム同調得点に有意な変化はなかった。その他、自由記述として、楽しかったこと・嬉しかったことに気付くことができた、明るくポジティブな気持ちになったという回答があった。日記への感情の表現により、生活上のちょっとした出来事や気づきがポジティブな感情を生じさせる傾向がみられた。簡潔な日記記述でも、対象によっては精神的健康度や未来への展望を高めるきっかけとなり得ることが示唆された。

(3)　対象者における過去 1 年間の転倒経験は、0 回 69.0%、1 回あり 22.0%、2 回以上あり 9.0%だった。転倒経験は後期高齢者に多い傾向にあった。性別による有意差はなかった。転倒経験のある者はない者に比較し、老研式活動能力指標が低く、ソーシャルサポート・ネットワークが小さい、経済状態が良くない、聴力の低下あり、身体・精神の主

観的健康感が良くないという特徴があった。性・年齢を調整した多重ロジスティック回帰分析の結果、転倒経験に強く関連していた要因は、ADL（老研式活動能力指標）、聴力、主観的な精神的健康状態であった。転倒に関連する要因として従来から報告のあるADL・精神的健康状態に加え、本研究では聴力の低下がリスク要因となることが示唆された。

研究協力者　安田南々帆

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小田中芹香，鈴木圭子	４．巻 6(4)
２．論文標題 健康な若年女性における日常生活習慣と口腔機能，握力の関連	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アグリバイオ	６．最初と最後の頁 89-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野寺美晴，鈴木圭子	４．巻 4(14)
２．論文標題 健康な若年女性における口腔機能と生活習慣の関連	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アグリバイオ	６．最初と最後の頁 83-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木圭子	４．巻 20(12)
２．論文標題 向老期世代における相談行動の利益・コストと精神的健康の関連	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野寺美晴，鈴木圭子	４．巻 22(4)
２．論文標題 青年期女性における口腔機能と生活習慣、食習慣の関連性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 91-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日景葵，鈴木圭子	４．巻 25(3)
２．論文標題 地域在住の前期高齢者における生活習慣とソーシャル・サポートの関連	５．発行年 2023年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 永田美奈加，鈴木圭子
２．発表標題 地域在住高齢者の口腔機能とメンタルヘルス
３．学会等名 日本看護研究学会第47回学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 永田美奈加，鈴木圭子
２．発表標題 要支援・軽度要介護高齢者の口腔機能に関する予備的研究
３．学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木圭子
２．発表標題 社会的孤立傾向にある地域高齢者における生活背景上の性差
３．学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Suzuki Keiko, Nagata Minaka
２．発表標題 Factors Associated with Falls in Community-dwelling Elderly People in Japan
３．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Nagata Minaka, Suzuki Keiko
２．発表標題 Effects of oral function and depressive tendencies on nutritional Status in older adults requiring support or low-level care: An investigation through path analysis
３．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	永田　美奈加 (Nagata Minaka) (10461716)	秋田大学・医学系研究科・講師 (11401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関